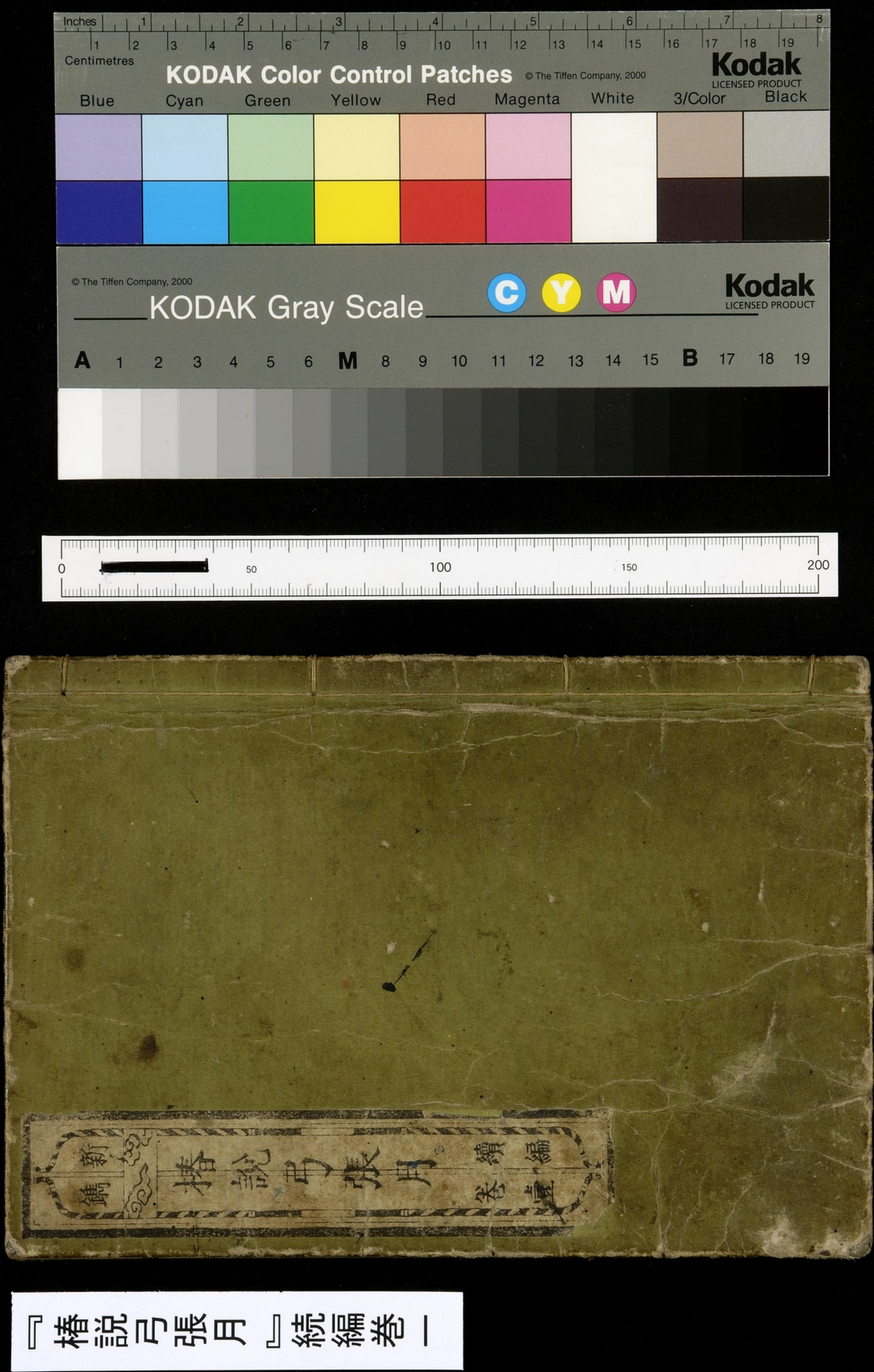


『椿説弓張月』続編巻一

三十六峯瀛海環怒潮日夜响滄浪樓西一抹青林裏露出烟蘿馬嵩山林麟焙中山竹枝詞

戊辰立春

散木老人書 藏

福山女學園大學圖書館藏

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月續編

曲亭馬琴譔

拾遺考證

琉球國ハ薩摩の南よりあり。三十六町ヲ一里と定めて、舟行百四十里。その地南北を長五六十里東西僅よ十里ふ過ざるなん。和漢二才圖會よ海上三百八十里とある世ハ恨なるべし。亦三十六の嶋あり。往昔ふ邦より琉球を呼びて。宇留麻迺久介といふ千載集ふ。

おぼつかなるまの嶋の人なれやとふ言の葉をも通ぞうけぬ

いかゝへハ言語も通ぜざりしふやや。和漢三才圖會ふ、琉球語ハ些許載ふ。所謂日ハおてゝ。月をもおてゝ。火ハおまい。水ハむさいといふ類注釋なくてハ通じがたし。亦中山傳信錄よ載ふる。琉球語を閲ぶべ。夫ハ町日ハ飛月ハ子息と注そおりそハ此方の言語よ違ざおりあふ。

和漢三才圖會ふ載ふる琉球語ハ彼國の古言ふて。彼處の土人下鄉ふ居るものハ今もふ邦の古言ふ稱ふもあるふや。中山傳信錄云。琉球土人居下鄉者不自稱琉球國自呼其地曰屋其惹益其舊土名也。とふて。於幾乃志麻ともふて。平判官康頼入道鬼界嶋よ漂れて派る歌ふ。

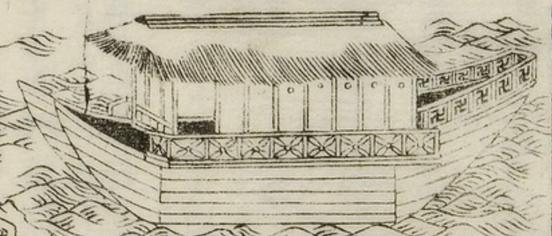
薩摩方沖の小嶋ふされありと親ハ告よ八重の潮風

源平盛衰記巻の七よ載ふる十二の嶋なれや。五嶋七嶋と名付ふ。五嶋ハ日本よ從へりと云云予が推量の説をりてふぐ。あたハ大洋の沖ふあめぐて。琉球をいふ歟。小嶋ハ其屬嶋ふる鬼界ふ傳信錄琉球三十六嶋の圖説を閲ふ。奇界亦名鬼界。去中山九百里。爲琉球東北最遠之界。人以手食

多黑色云云とこゝろ。かれが鬼界ケ琉琉の属嶋と泳ぐるおや。と
おぼし。又神代紀ふ海宮海郷とあれば。琉球のそなるべくよ。琉球談
ふ注せられり。下も辨ぞ世俗龍宮とふ海神の都とする処ふて洋中波底別ゐ
金殿玉樓あり。と云ふれ悦ぶ。その既ふ謝在杭が五雜俎ふ論ぜ又
蟠龍子が俗說辨ふ難じたり。愚按ずるふ龍宮ハ琉球ぐ。本朝怪談故事
ふ云琉球神道記ふ云琉球國の王宮ふ榜とするに龍宮城と書ば袋中
の曰。是ゆるとゝれハ。琉球とハ龍宮の義なり。音通ずるゆゑ欤。この國
東南ふ在て。水府の内れ極深の底なるべし。故あれ哉
天龍地龍の社あり。是を天妃とふ。今異國人の菩薩と稱するハ
是もとゝり。今試ふ。これ拠とするとゝれハ。神代紀ふ所謂海宮ぞ琉
球のまもと。いふも亦誣ならず。彦火火出見尊。海神の女豊玉
姫を取て海宮ふ留て住ること三年。そのゝち豊玉姫。女等玉依姫と
將。風波を冒して海邊ふ来到。方産ふ化して龍となり。縁下ゆ考合
そるふ信録ふ中山世鑑を引て琉球開闢の祖を阿麻ふ美久とふ三男
二女を生む。長女ゆ君々。二女を祝くとふ一人ハ天神となり。一人ハ海神と
なるといふを胎合をとれハ。神代紀ふふ海神ハ阿麻ふ美久豊玉姫ぞ
君く玉依姫を祝くおりといふも。その義遠うゝび。且豊玉姫ぞ龍と
化し。海途を閉て去り。玉依姫ハ留りて児鸕鷀草葺不合尊ゆ養
育まつらせ。一人ハ天神となり。一人を海神とするとある。
中山世鑑の誣ふよくあり。亦同書ふ云。琉球始名流虬。隋使羽
騎尉朱寛至國。手二萬濤間見
葆光云。隋書始見。則書流求。
宋史因之。元史曰瑠求。明洪

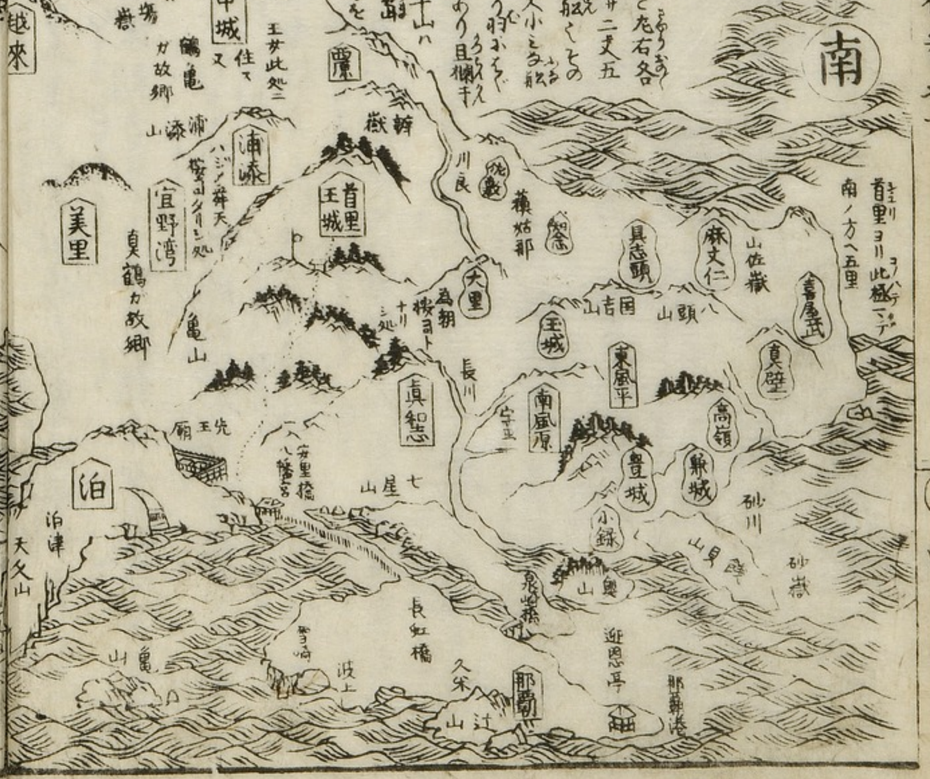
琉球全圖

中山間切十六〔記トス
山南間切十二〔記トス
山北間切九〔記トス



○太平山船

舟の板ふ檜を以てそこと左右各二ツ松の長サ八丈余寛サ二丈五六尺東西慶海の大舩にして諸島へ往来の舩ハ大小ともに底尖りそこ板ひろく舟ふかし太平山の松小節あり且撓ありその外ふから舩太平山ハ琉球南のかたうる島舩ありこの舩ところ多をつくりそ給ふ



○獨木舩

民村漁戸ところこれを舩ふ大なる木をくりぬきたるものにてふねのごとくそこ水かゝりとをふかくそこ平なりこれがニツをつるねそれをつふとそ

武中改琉球。といふ。かれがこゝ邦あて琉球を宇留麻乃久尓又於
茂迺志麻とぼじ彼処の土人こゝもその國を稱して屋其惹ひ。
又流虬ともいふ。唐山もて階の時。比じめて流求と號ふるえの時あそ
瑠求と書明の洪武年中より。亦琉球と更めよう。今いかんぞ
琉球と唱ふ。その國の形虬龍の水中ゟ浮むがごとくなるをもて流虬と名
づけれが。中葉その王宮を龍宮とも稱するなるべし。虬龍ハ和訓みづち。
角なき龍なり。又和名鈔ゟ水神を美豆知と訓ぜ又水神の女を
象罔女とふ神代紀ゟえたり。これらの縁故をもて推とれば大
古ゟいへる海宮。今俗の稱れ龍宮城。とる琉球のことあるべし。抑彼
國ゟ北極地を出ること二十六度二分三釐暖氣他國ゟ勝れて。
正月ゟ桃の花開桃杷熟十二月ゟ氷る。蚊声を牧ぞと傳信録
月令の條下ゟえたり。その風俗ゟ
いふりのゟ中山傳信録ゟ略琉球聘使記中山世
譜。定西法師傳ゟの説をまじへ記されて粗世俗のあるところなれば
こゝもかしこの編ゟ為朝琉球ゟ漂流しその子舜天丸彼國
ゟ王となりよし。ゟ逐れが更ゟ蛇足の辨をなすのこと凡琉球國ゟ
三省あり。中山ゟ中頭省。山南嶋嵐省。山北國頭省ことなり。
三省の属府をべて三十七。これを間切と稱ふ間切いこの方あいふ
郡縣の類なるべし。首里をもて王宮とし恩納をもて五嶽の首とし
その圖説のごとくいへ。傳信録ゟえたり。この編の列傳ものゝ彼書
ゟ載たる人物ゟ抜萃して私ゟ名ゟ設ぞ。又右ゟ圖ゟこれ一張も
同書のまゝ。摹寫ゟたりのなり。

海上幡飛
童結子
月中丹桂
又生枝

舜天王源尊敦

昨夜深
園雪等
寒兄ふ
ゐ庭前
看玉樹
腸断恠
連枝

孝子鶴

孝子亀

曲路幾弯起
野徑
虹橋一帯駕
波濤



滕雲國師

松影映
池
龍戲水
梅
花落地
蝶
翻風



禁中官南風原親方利勇

宜野湾真鶴



王妃中婦君

人心生一念天地
悉知善惡若無
親乾坤必有私



中城按司毛國鼎

社稷保全縱死芳
名不墜綱常振立
雖亡生氣攸存

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月續編總目録

第三十一回
爲朝水行赴京

第三十二回
白縫披渕没海

第三十三回
忠魂憑鰐救幼主

第三十四回
毛國鼎忠說破利勇

第三十五回
寧王女捨身議救民

第三十六回
真鶴孝烈赴北谷

第三十七回
尚寧王腰輿登高嶺

第三十八回
毛國鼎稟命赴小琉球

第三十九回
一夜夫婦守永訣

第四十回
浦添山國鼎逢俠者

第四十一回
沃淚松壽擊廉夫人

第四十二回
舊虬山古墳現曚雲

第四十三回
寧王女捧珠歸龍宮城

第四十四回
鏡中幻術割骨肉

第四十五回
中山府利勇殺忠臣

第四十六回
顯神白縫祐寧王女

松壽月前躰妻屍

第四十二回

査國吉仗義戰中城

第四十三回

拐腹阿公奪赤子

第四十四回

尚寧王戲言噢禍

第四十五回

挾偽王子利勇娶軍兵

統計四十五回其三十回以上出于前後二編

續編六冊目録終

拾遺六冊

若赤瀨碑王女逢為朝

嗣出

東都 曲亭主人編次

鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月續編 卷之一

第三十一回

為朝水行より京ふ赴く

白縫譚 針盥

人皇八十代高倉院の安元二年。丙申の秋八月十五日のことなり。鎮西八郎為朝。肥後國芦北郡水俣の浦より舟出して主従僅ふ三十餘人。滑ふ華洛に推渡る。清盛を狙撃。君父の冤を雪んとて猟船二艘ふ為朝白縫ことし針盥をとりて九餘人の郎黨相従へり。亦一艘ふは為朝の嫡男舜天丸赤子なれども白縫の寄るこゝろふして母貴なればとて嬰児ふを称せ太郎夫婦。高間の妻名ハ磯萩ことし傳へて十餘人の郎黨相従へり。この日天

よく晴て一点の雲もなく。渺々として洋中。波静かにして。順風帆を揚てゆく事日ならず入て。月は海より出て昇て。頃しも秋の最中なれば。金波銀波を漏り。玉兎浪を走る。沙風いと冷かなりかゝりて曉方ちかくなるまゝに霧いと甚くなりて。咫尺の間も見えわかず。船は潮ふかくして午の比及ぶ。霧は霽れど。何処の澳ともわかず。時ゝ魚のうち狀鯉の如くはしりて。鳥の翼あり。蒼文白首嘴赤く甚音鳶雛よりは似て。波の上を群り飛ぶことおびたゞしく。水面嶺と泡ぐらて。米糟を散せれごとく。夥の海蛇浮出て。船の左右を充満ること。それこそ夢のごとくにて。衆皆面をあわせつゝ。さしも惑さうなるのみ。當下為朝は水と天との景迹ふ目をつけて。大よ驚れ白縫姫も宜なう。それ西國ふ成長り。又伊豆の嶋くにて十年の春秋ふおくりしかど。渡海の風信自然ふ大約南海そ。二月清明のころ地氣南より北へゆく。それ九月霜降の後地氣小より南へめぐる。それ大風烈しくを颶といふ。又甚しきは颱と稱ふ颶は常ふ驟ふ起て颱は常ふ颯ふ起て。颱そ渺茫の間ふ遇へるは。五六七八月ふ船おほし。渡海の船颶を遇へるは。十月以後二月ふ船ふ遇へるは當がたし。十月以後又翌年の二三四月ふ颶おほし。正二三四月は北風常ふ定期あり。五六七八月は南風ふ颶颱ふ脱ることあり。颶颱ふ遇へるは。その風發らんとするふ北風ふづ至る。稍ありて東南ふ變じ又稍ありて南となる。ふ颶颱のそじめて發らんと

こゝにとゝおひづうみふたゝび両陣るその上に半天ゐ一朶の雲生づ。ちこ
斬虹のごとくのあり。これそのあまの意なり。又船の起るごとくよ帆のごとく
雲生づ又ほそく天ゐ及ぐ稍驚のごとく
象形り。驚を鰲ゐ似て。南海よ生ぐ。十二の足腹の両旁より生眼
そ背の上ゐありてそのロハ腹の下ゐあり。そのりの海を過る毎ゐ。
相負ぐ背を示し風ゐ乗じて行を海人これを驚帆と呼ぶ其
皮穀甚堅し異國の人これを冠ゐをとゝいへり。あれこゝよ人今も
又驚ゐ似ぐれ雲半天よありり。音笑。船発らんとそれバ海水滅れ
泡ぐゝちて海蛇鼈水上ゐ浮こ。文鰩魚群てあぶ。舵立これを
そそへ。ふぐ〳〵怕と遠く慮りて。帆を收め。舵を厳重はしてこれ从避。
り準備速なふざれハ。船忽地よ傾覆ることあ」今ニッの不祥

悉く備るそのごも。なそて帆をおろこぐ
さゝふり。衆皆舌ゐ振ぐ。驚れ瞬つ帆を引おろ」。そて碇をおろこ
ことふ。底ふゝしてその猟そぐこぐごうもめ〳〵ごれへ。ごいうゐせん
とて。いぐ周章そ。浩処ゐ遥ゐ後よぐりけれ。舜天丸の船。ゆうやく
に乗著て間ちぐ艚なくべ。八町礫紀平次。高間太郎ホ舳先よ踞
踞し主の船よ對そまうひやう。今暁より。狭霧ゆゑくならこめて。
船のゆく所をそゝび。東へ赴くべ。船の南へ流れるうとおぼ」
加旃。何とうゝ海の氣ろこの怪しくこゝえ。君ゐいうゐおぼ」ゐん
やうんと。問ぐ為朝こゝりて。海連がいふごぐ。船南へ漂流せふ
疑ひし故いうゐとなれバ。文鰩魚の群ぐりおぶをなげ足をおれり。
彼魚ハ南海よ多し。おりゐふ薩摩洋をまること数十里なれぎ」。



文鰩魚群飛

えよ。半天み怪しく雲あり。且水の上よ海蛇
黙〻く生るぞ。即悪風起らんとするの前
象なれ。今これを避んとすれ。舩行入る
べき港口なし。只〻を空して死なん候のこと。
時命の係るところ。それ力なくんそべを
ちつぶし。今さら致るくるみわと田答るふ。
件のあ人眉を顰め。もうといくども知つ
これを防ざれ。智の足ざれ小似ら。舩
大たなれば。風波も輙く傾覆るに至
らぞ。稚君の四舩と。殿の四舩を発おく連
環し。衆人力を戮して艚をいてう必



海蛇浮出



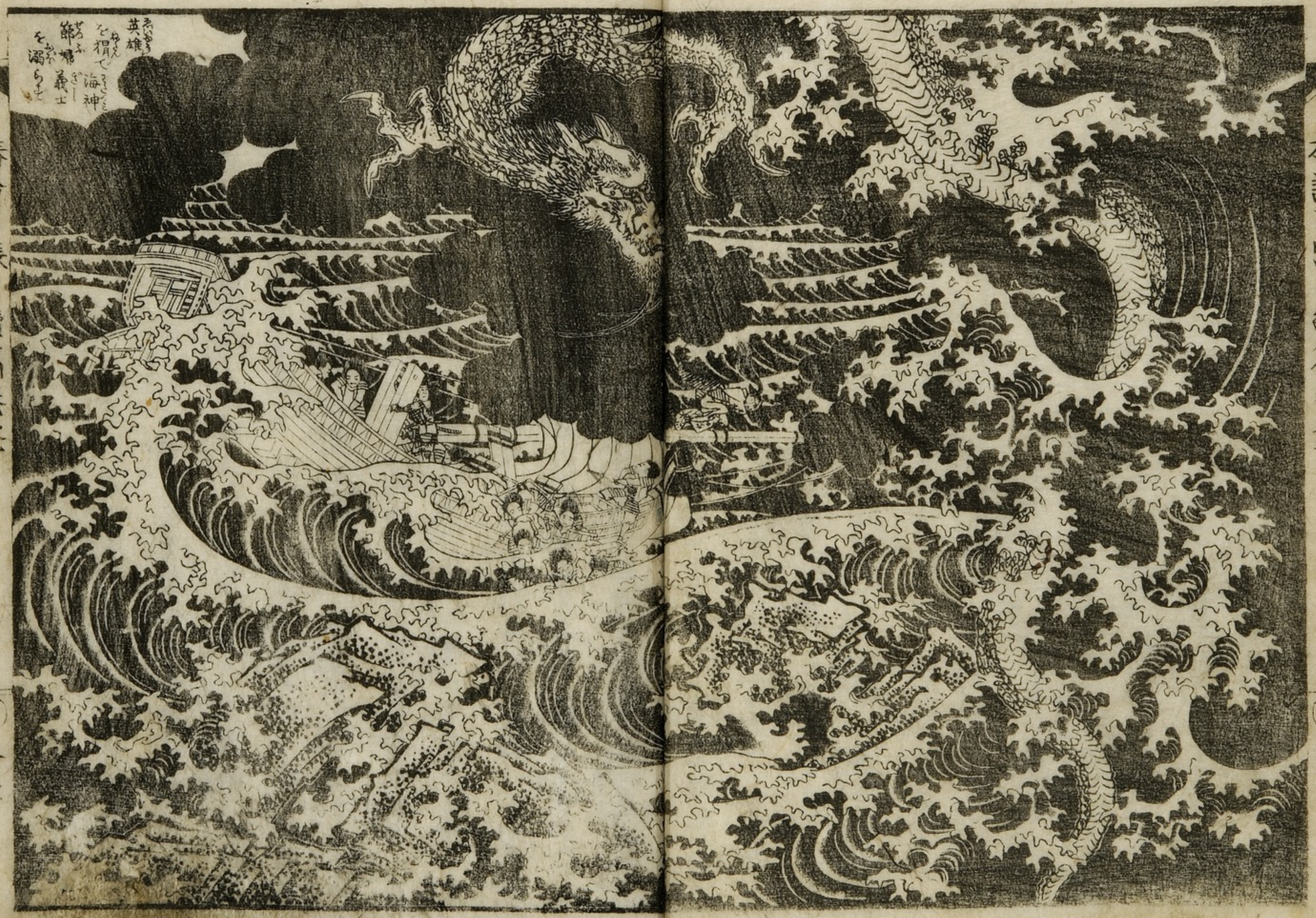
死を脱とるらぶ人と信ざらて既よ猶を
投うけんとすれを。為朝急み押とめ汝達
の言差へり。親子そろ舩よめりてその
厄難を免しく稟んこと究めて宜うぶし。
つぶ主後三十餘人命必なるりのこれ
あしじ。かの網み入る魚も。十ヲ八二八脱ち
りの如。抑為朝伊豆の大嶋よめりしとて。
そうち每う以下の七嶋ふ往来し早潮黒潮
の灘をすり屑とせざ。千里の波濤を家と
もそ。一下そじも大風ふ吹流されるるろ
ろれ。皆是神仏の擁護あるふ似ら。もる



鰩魚文ふぶとがふ

ふ今。華洛ふ推渡る。えふ君父の仇る。清盛ふ狙撃すんとするに。挟霧ふ
舵をそう悩って。剰風濤の難ふ。親子主従悉く。大魚の腹ふ葬れなべ。
天うう命ぉう。そべて一年十二ヶ月。悪風の發る日ぁり。八月十五日と魁
星飈と称る。箕壁翼軫の四宿そこる風を起そる処主れとそ。我
これをあるざるにあらびさのふ魁星飈の日期ふ航出してるく。今日
ふ至るく飈よあるぐとても脱がくれ主従が命ふいやとらくくまふ其言
いまぐ訖らぐそ。船の前後ふ龍ぁふうれて。水の沸ころる二三丈瞬間ふ
風颯と吹ふる。沌とそぬれ。天曠ふ結陰。大雨盆を覆そぐごとく降
そぐだ。四方野干玉の烏夜とうりて面ぬあそるも。迭ふその人死
えてそ只声をあるべとして。おのくく罵り所しカを戮して。贈賄を揺り。
命かぐりに働けども。風雨ますます烈くて。船そ只管ふ跳り繞り。浪
をお入ることぁびくなれが。水を浚乾そふ遑ず。衆皆瞋眩て撲地
と仆る。舜天丸の乗る船も。いづちのれそんおぼつかなさにあり。
えべそそまぐい。其処ふとどまぐ。船ふ日今傾覆べうえそうけ。當下白縫ハ。潮垂ふ両の
袖を絞めび。よろめく足を踏うるて。声ふありて。御曹司かくてハ
万死ふ一生を得ざじし。彼ふ景行天皇の四十年。日本武尊東夷
征伐の折うふ。相模より船出して。上総へとて赴れるふ。暴風勿忽地
ふ起ること。皇子の船漂蕩し。既ふ傾覆ふんとそうしぐば。その妃
等橘姫命。穂積氏忍山の宿禰皇子の代て。入水してせるへり。さるよろ
て風波立地ふ軟ぐて。船恙ふ岸ふ着ることぁうそ。君が
武勇日本武そるふ劣りるべ。妾が心操。弟橘姫ふ及ぞそも此処を

英雄を滅ぼす海神
義士を渦らす



犠として。海神へ献らん。風の止ざるやうあれ。往あひ夫婦の再會も量がたし。とゝひくしと仰りつるに。讃岐院の荒神靈。おほんいつくしき。環會のやうり。年来の懐さをも語慰めて。舜天丸といふ子を一人挙。七年ぐ経育眉もりて。既ふ志そいにしより。夫婦親子ぬ愛惜哀別離苦のあるかとなさん。そこにいにし竭そべうハ仕ふねどつろ身をいとうを捨てく。君ぐ為ともに舜天丸も。辛じて脱且仕ふぶ足よまん僥倖なし。今ハをや。汝の暇をのるるぞし。といひも果ぞ跳り入んとしまふを。為朝連忙く抱き住め。乃父が心操かまることをぶ。我勅勘の配軍として。日本武のいまへ比んそいともかくとし夫婦りあさともに死るハ死るん。兼忽の挙動ふまふ。と理を述くさでめんへ。白縫とそふり落る涙を押拭ひ。さのさまをそれ一言の情ハ絆とうるのかく妾岐ふめりしとそれ新院面あくりぬえもあらじまふるの仇ぐ。汝ぶ夫婦の縁く既ふ絶れるもその志の切なるをかさ。一下くびハ環會そべしされがふくびく夫よめふるも又いく役もるく離別せん。努こくふもるるなれと説示しめるハふのるめふく仕るめり。かくれるのハ君もそひ當りまふべおそめふいと汎はし係家氏の太神男山正八幡肥後國みを鎮すん阿蘇の明神。そて讃岐院の荒神靈。哀愍受納の瞻をえしハ大龍王感應めて良人をこじめ私中の黨ハさくふ形りつぐ子の私も恙なく。湊のつくへ吹あせまくと高きに祈請しの。ほさうとめられし袖ふり拂ひ。瀾を披きて千尋の底へ身を跳らして没ぬふ。められくうおさ寂期ぬり。もろれぐも風雨ハるほ止ぐして。海の鳴音凄じく。舩ハ翔を蹴るごとく。高く揚りて

半天ゟ至り。或ハ傾ケ低く。吹ても吹ても浪よりも低く。吹ても吹ても浪よりも低く。吹ても吹ても浪より

也　餘人の部黨ハ。白縫入水ゟ外ハ。悉く死亡ス。

いろ〳〵と云ひこゝに紙ゟ筆ゟ取出して。ゆう〳〵に筆を起し。吾們未原山ゟ

ゟ取つゝしよう以来。余ハ君ゟ左右ゟ琴高が鯉ゟ降り

列子が風ゟ御ゟふあらばこそ。誘ふ人死出

の先登つゝまつるをしと云ひ果ぞおの〳〵刀を引抜て。或ハ腹ゟ切り。或ハ

ちぐ〳〵より將隨て名をこゝろ〳〵荒海の底

の水屑と成ハみちり。為朝ハ日今白縫をそじめそこ。北條人

の郎黨が入水をも数囲歎息しそも清盛が運の強

さよ。為朝必死の兵士を招て。華洛へ潜のぼるそのゝち這奴が

首をはねんしみ。龍神ゟ人世ゟつれてもごこ平氏ゟ荷擔そるよ余

運の竭るところ。世をも人をも恨もよしみし。偕老の妻を殺し。ま

足のちひをうしなひつゝ。いつまでかくてあるべき。舜天丸

が舩。ゆく〳〵ゝなりて。その生死そもふぐれども。今ハくや大魚の腹中

ゟめぐんぞくん。ちひさや。荒磯ゟ骸の手ゟ引ぱなし。思ふ

ゟ宿志ゟ果さんとそれ時ゟ臨こ風波ゟ進退究まる人も

ゟ海の。八重の潮路ゟ沈んこ已ぬん〳〵。とゝろ〳〵腹を切んこ

ゟ折ゝら。怪しゝる電閃と舩の上ゟ天降りて。

異類異形の天狗ども。舩ゟ主あらばこそ。舩ゟ人ゟ悉く

ゟ傾ふこゝろ〳〵ゟ忽地ゟおこゝろ

に同音ゟ祈りつゝれハ。讃岐院の神勅を稟。吾黨こゝろ〳〵ゟ

をやる。為朝卒尓ゟ死そべき夫豪傑の士志を舒。名を揚んこする


讃岐院の
冥助
為朝の秘を
伝ふ


椎詣白縫ト強助縛傳

そ。天まづ百折千磨の憂苦紙喫さし。その筋骨を堅うし。事の情
ふ洩らしむ。譬ば梅花の冬ふ含み雪霜ふ瘦さるも。春にあへく。
香氣百花の長とれるごとし。
耳ふ入まど。為朝へ夢のごとく。
の安危如何。次の巻〳〵ふ讀給へく。

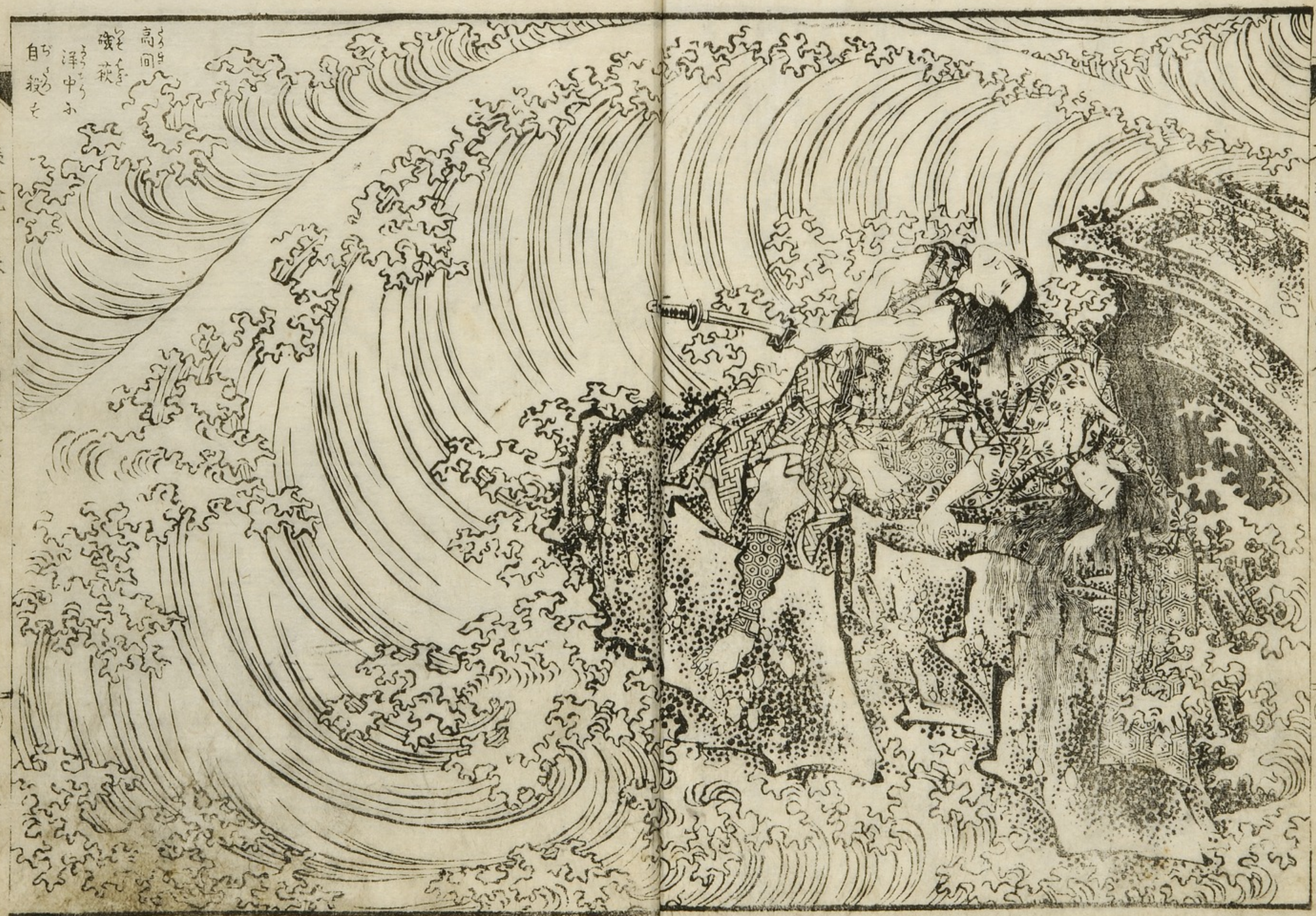
第三十二回

忠魂鰐ふ憑ふ幼主を救ふ
神仙氣を吹て妖折を甦さ

さても舜天丸の私を。艇の艘折をく。其所とも
ちらび漂蕩はどに。艇折をく。
右まふ抱き。左まふ板子を挟こ。ふあゆる神仏を祈念し。且
為朝白縫のうへも。おぼつかなけまど。それさへひめづるふ遑
ぞ。高間太郎を。磯萩とともふ。十餘人の傍輩ふ励して。〳〵先途
と働けども。力究て勢ひ竭く。即座ふ死それの五七人ふ及べり。其
患難比るふりのおろかぐし。元来必死と思ひ定めこれ主従ふ。今さ
命を惜むふ足ねど。敵ふ当りて志をいさし。武名を後の世ふ遺
そふもあくてらさばこに青海原の底ふ沈こ果なんの打惜
く。西も東もわりのろね。稚君をさへうしなひたまへる痛し。
ある仏ふしとて。叫べど声もなくべこそ。磯と輾びく起るほる。力も
なくあふ海ふ。弘誓の私をまつだかり。紀平次も今はとて膝ふ
うたのしこれ舜天丸ふさ。母なるまをあはこ。そくもる念佛そろ
ともふ。私を巌ふ撞と當りて滅裏ふこと砕散り。浪うち被ぐ主
従ぶ。うちめげられてハ又沈む。生死流轉の八苦海。屍ハ相抱きて

涛浪の灘ゟ漂ひ。魂を相伴ふ悲しむべし。そゞ中に高間太郎ハ。こゝろ利たれ壮佼なれハ私の碎れをこそ。磯萩とまを組あめし。波の底ゟ晩巌の上ゟうち揚られ。からじて死を脱るれども。外ゟ助れ私もなし。舜天丸入水ちゃひつるに。後ゟ追〳〵ん〳〵ハ不忠なり。稚君のみを悔てかへるぞ。りし大殿の四郎私。今ゟハ傾覆ぞして漂ひあらゞうら魂魄いづちまでも守護ゝもり。縦人なき嶋なりとも。恙なく岸ゟよせ進〳〵せうん武士の家ゟ生まれし男の病て死なんそ本意なくねど。いひぐひ〳〵溺死せんより。吾妹子をもまゟかけて自殺せで。そしへ私ありうりし。四男ハさもやめぞや。といふ声もよろりゆく夫の心中推量り。根萩ハ潮垂る。額の髪をかきあげて。いと苦しげふ島ゟ吻ゝ。婿夫の契約ぞしく夫の刃ゟかゝれ事過世ゟふく結びそん。縁こそ喜〳〵と。ゟうあれど。遺憾そこの年ゟ。おん傍ゟさもさぞして。給事せし白薙姫。ゟ恩高きこゝろ君のいうゟなくなふともゟふべ。それへ私かゝるゟ。ゟれ多の後ゟ眞土ゟて君ゟ夫婦ゟ舜天丸ハいうゟもつれと阿母とゝろば。さこそ面なく。ゟゝめ。せあて吾倩の魂ハおん亡骸なりとも衛僧ゟて舊の浦回ゟ著ゟゝせ。水朕人のまを借りて。葬しなふば。般若の舩ゟ乗かへて。彼岸ゟ登のふぶ。せゟあるとゝは数うゝで憂ゟれね吾仁そゝふ。忠信節義そ人ゟこふ。竭ゟひぢるの私。況今ゟも昔ゟも例そゝ名ゟゝつれそひふ姫君の心烈そ女のかゞそと。圖ゟ処を照ふしまん。神も仏もそりゟゟ。

あうつゝかゝれ厄難を救ひのいねいうまぞや。應驗と申ふ冥助と
申ふ。物の奇特もなき世うと恨の堪りかきに說いとゞ王子の血の涙。
巖ふ落くい方ゟ是彼東海みありといふ珊瑚の枝ふ異なくび。
高間これを伏てうち点ひ給れも右こそおりふれ人そ寂期の一念
みよろこ生死引ぬくび涙の喩ざれ隊み。そくく追著なくん殺れ
ものふる歎じと迭ふ諫めいさめられいと白ゟなれ破荻ぐ胸のあう
へ刃く刀尖ぐさとにくねく一下ゑぐり。さと濆る血刀をさりなほーつ
高間太郎も腹一文字みかき切くう。されば会常の風をそ。撞とよせ
ける紅蓮の浪の。下ふ布と夫婦ゝ屍そ沈こ果ぬるぞ哀ほうれ。
この時の景迹をそーくくそえくあふぢめれど後ふかくやと推量り。孤
忠苦節を語り続く。物みさん書記一世のに順となれるるぐし是そ
さてゟそれ八町礫紀平次そ。むひし琉球那覇の港みく。為朝の私ふ後し
時。邊ふ浪路を隔くれを。撫くく泅た著ぬれ。水戯の達者なれがこの
日私の破ゟ外えそ。みづくふ水中に跳り入り。たまゟ板子なくく
多を浮し。右まあ舜天丸を高くさし揚て。波風を物ともせぞ。命の有
ん堺りつと泅ぞるが。只渺くくれ青海原ふ斥てゆくぐ鳴ぐゐえ
えそ。雨さへいくく降そぐて。海の面ふけ生ば。想ふべき巖ぐる
探り當らぞ心のこへ猛くれど。そのゟ鉄石みあふぢれが終ふ力衰へ
腕撓こて。吐嗟溺ゟ死そべうもぼえし折くふ。遠前面みそのありて
晃くと光りくう。こ神佛の擁護みく。倘稚君の命助ゟるうんえ
と欣ーく。ゆくび心力ゟ励し。辛じて間らかくなれ。ゟに晴を定めて
これをそれいこへいうみ。その長丈余もあふんそくんとぼーれ沙奥


高回
殘荻
洋中ヵ
自殺セ



半身を水の上ゐあらはしつゝその赫奕たるものゝ彼が眼の光るゆゑぞあらん紀平次これを見るに大きに驚き。嗚呼ゐ主従この悪魚の腹を肥さんよ。腰の刀ゝ佩ゝれども。稚君を抱きまゐらせていかでか魚を殺んよしや殺ずともなれのなれでとても活るゝ者もあらぬふ。怕ゐることとゝゝみづからひとゝゝもやがて退きもぜざるゝ浪間を泅ぐわどに。悪魚を忽地紀平次をこゝ。崖ゐひとしたゝに伏開たる劔を裁ゐくゝゝれどゝ歯をあらゝし。潮を蹴ゝてこゝ。よまる斬ゝもあれ高間夫婦が形體。煙のごとく立あがれ。俄頃よ二つの燐火となりゝ。悪魚のはゐ入るとゝえゝ怪ゝてう物。聴ゐゝ沙魚ゐ。猛ゐ開ゐる喙ゐ紀平次を被ぎあげ。ゐをゝ背上ゐ小助乗ゝて走るゐ私よりも速ゝりけり。紀平次をこの形勢をゝゝ。

且怪こと且欵びさてハ高間磯萩ぉ。その牙溺且死ともいへども忠魂
この大魚ぉ憑り。雉君ぇ救ひ奉るよ。むかし唐土の韓退之ハ文を祭
て鰐を諭し。遠くこれを退けしと。笑ふハ屑ぅぐ。高間夫婦ぇ
異國ぁも。ありがたうれべ。忠臣うぉと頻ぉ感涙をそゝめうぁ又今
さらに為朝の往方いくゑぁせごろうさうぉ行ぉ
その日も暮れた。風波やうやく軟ぎしうへ。沙魚ハいよ〳〵ゃさかな
通宵浪の上ぇ走り。天ハそのくと明る比。笑ぎぉ嶋ぉ泅ぎ
著。浪打際ぉ跋ようて動うだ。紀平次をその意を訝て。ぁがて荒磯
ぉ登りつゝ。大魚を見えうていふ。高間氏夫婦の忠魂むなしうぶび
ちく。大魚ぉ附托し。心死ともひ定める雉君を救ひまゐらせぁ誰
うその右ぉ出ん盲亀の浮木ぉ遇るよう。なほ稀なれ僥倖なり。是
全く雉君の洪福ぉよるものうしを存命。可惜夫婦を三十ぁも。足ふね齢を一期ぉして。千仞の底ぉ沈
こりん。そもゝまうせねば世なりぇ生死道を異ぉそれべ。とゝぁ別を
決るとも。とう易くれ雉君ぁ老ぶたる紀平次を惜うぶね男
なれバ。曹司のぉ報るり。彼をおりひこれをおりふ胸苦しさ況察し
るべ。その人ぉ抱いふぶく。卿ぶほしき健男の誠ぁそや凄じき大魚
も潮ぉ吻ふく。ともに愁る氣色なりしが。返巡として一反ぉ沖の方
へ退さつ。二ッの燐火水面ぉ閃た出。大魚をさぶ追り燐火ぇ消て
迹ぅくなりぁまりぬ。このとたまでも紀平次ハ。舜天丸を懐ぉ楚ご抱
ふとゞじめて仏もちかた。汀の石ぉ尻をうけ。獨君ハいふぁおいそぶん。
生死の際もありぁぶ。睡りぁふ。それや夢ぇといひけて。

つくづくさし覗けハ。痛しといふ舜天丸を。いつの程ふう縛切ろう。これハとむうち驚き。慌しく懐よりかた出して。声を惜そよび活れど。磯馴松風岸うつ浪の外ハ。絶てくいとへなく。砂ハしる貝のうらハ。夜の雨の淵り水を。いろさへ変る唇おさし傾けても含せても。咽喉ハ下らで。そもかくふ。落るハおのゞ涙なり。ちづくと立て目ハ押拭ひ。かくあるべき事ハ。大魚の奇特おさりともと。憑むひとなくれひとり。存命て何久せん。高間夫婦もいと恨めし。ひの八千遍百千遍。縦一年三箇月注ばとて叫べばとて。終果のひし魂の緒を。繋ぎ留べき術ハあらぶ。抑てハ何国ぞや。人住む嶋とハ。こゝそねども。せめて亡骸を痊まるせ腹うち切て。三途の川も死出の山路も紀平次うち負て越うん。俟ち人ぞやれハとじやう。主従の縁浅うれて。二世の宿因違うぞハ。導れる人地蔵尊。南無阿弥陀佛と念じつゝ。瞻仰視ゝび嶋山の。高峯ハかくれぬ。朝日のかゝやくものハ。茜さん。朝日のかゝやくものハ。茜さん。朝日のかゝやくものハ。茜さん。

ぬ木の子草花芳しく。人ハおそれぬ鳥の声。耳嚢ハ瀧津瀬の外ハ訪べき家もなし。浩処ハ峯吹おろす風のまゝく。幽なる耳ハ側そ。ある不審し。人もかよハぬ荒磯ハも。潮垂衣苫ハ行ひすまし。こゝのめりそ。こゝ仙人の崖宅なるべし。侍人ハ。巨海の外ハ十ヲの洲めり。人迹の希絶ところ。ほして。その中ハ神仙あり。丹を煉真ハ終ハ。天地とゝもハ寿しくこそ。所謂徐福が不老不死の薬を求ろう。とハ説も誣ごとしとふぞハ観音大士のおハしまさを。補陀落山ハやゝんぞ。ふんかゝれ仙

境お入りねるこそ幸なれ索ゆ縁由を愁訴し。実奇回陽の薬も験なく。稚君の命数こゝお竭くべく。隘獄の苦患を脱して天堂よ生ぐるようそがごともなおべく。

あゝうれしや活延てこの嶋お漂入名〳〵おも。そのうひあり。ありなりありと。ありごと。その使屍を抱さめげ。読経の声を公あてお。うゝお路なき磯山を辛じて松柏の巌お縁て飛花の澗路滑お。直下せば。十万里の波濤天お続り。さくしく二三十町登り来つくん。とふ北白鹿木立の間より走り出。紀平次が前お至さく。紀平次いお。身體猛よ軽く彩雲天お遍〳〵て春花の林よ舞似り。向上五六数千仞の阪磴七繞りつゝ攀登れば。実風地お觸りて紫蘭の室お入るごとく。おぼえず須臾の間お巓まで登果。とそれいおりの老翁。紅帽衣載て鶴裳を被て巌の上お端坐せり。その形容須いて長くして身よ眼秀眉髯白く童顔仙骨凡ならび。紀平次そその神仙なる代おりて只顧つお驚嘆し。巌の下お跼蹐して経を読をるとまつふもだしありて老翁そ。ろうお経巻をまきてかさもるとて。紀平次いうやく近く寄れとらふ。その聰察常よおそくなれい。紀平次いそかしこゝそ。そのふ風波のるふ船を破られこつお漂泊あされ一五一十城告れふ老翁うち点頭汝やそや。常言ふも。苦中の苦を嘗〳〵て人の上

の人となるをしといへり。苦楽時あり。死生命あり。今その児を相そふ。
暴ゐ水ゐ落て驚死をとゝめども。余数のまぎ竭ぞ。これを救ふすべ
易し。こゝろみせよといふゐ。紀平次ハ天ゐ詠び地ゐ喜び忙しく舞天九
を老翁の膝の上ふ拉乗ゝかゞめて抱きゝりてその口中よりおの
が息を吹入ゝるに奇なるかな舞天九ハ忽然として蘇生り一声高く泣
生をを。揺揚て縑をほどに立地ゐ注止く。生平ゐ異をれをしてを
紀平次ハあまりの嬉しさゐ。不覚ゑ涙はしぐゝて老翁を数回伏おがみ
をし神仙の屈よろこびぺ。枯をゝ魚の水ふ躍るこの僥倖ハあるべ
びそも老翁ハいふある紳ゐそもふん。此嶋の名もやうもをしもし
ゐんとしいふゐ。老翁答そ。それハ名もなく氏もなし。源家ふ舊好ある
りて。縁のゝゝふ及べるのこゝの地方ハ姑巴汎麻と名づく。琉球國中山の

馬琴按ずるに佳蘇魚そかををおて堅魚のてう黒鰹魚のて日黒うべしまぐうを呉方まそもむにハ目黒かつをとゝり肉を割く腊ともるとあれハ琉球ゆくいまぐろをもうてゝろをとゐふゐん

正西ゐ當て四十八里六十町一里をりて記せり。今琉球道を唐山の里数をりてしといへども海ふ珊瑚ありゝ山ゐ仙桃ありゝその果を食ふものハ飢をゝ寿しこの嶋ふ白鹿あるハゝかの桃の葉を食のゐなり。この姑巴汎麻山そ。琉球の属嶋とれ。姑米山ゐ相近し。大約琉球ゐ三十六の属嶋あり。先東の方ゐ四の嶋あり。第一を久高と名く。琉球國中山の東十四里半ゐ當まり。六十町を一里にてこれをこゝろの下ことふうん穀物ゐ赤籾米黄小米ありゝ海藻ゐ海帯菜ありゝ魚ゐ龍鰕五色魚。佳蘇魚ありゝ本黒鰻魚と名く。大なるそのの長八九尺。その肉を割く腊とそ山ゐ螺石多し。第二を津堅と名く中山の東三里半ゐあり。第三を濱嶋と名く。南北二嶋中山の東三里半ゐあり。第四を伊計嶌と名く。中山の東三里ゐあり。此三の嶋の産物姑産佳所謂ゐおもろし抱のいひざまも又相似ゝり。亦正西のかとふとの嶋あり。

第一を馬歯山と名く。この嶋二ツ并れて東馬歯山ゟ大小五の嶋あり。牛馬栗布。文貝一名ゐもり螺怪石を産す。西馬歯山并大小四の嶋あり。こゝゟ座間。美渡。嘉敷ホの間切あり（間切の琉球の方言。その方あて府といふがごとし。琉球ニ三十六の間切あり。これ国府ゟ分わかつ）。

海松あり。彼嶋人これをとりて生活とす。馬歯より出る海松はその茎久しくして退ふべし。味最佳。又海螺を産す。山ゟ鹿多し。この処姑米山を去ること遠うゝべし。第二を姑米山と名く。中山を去ること四十八里。安河。具志川。仲里ホ二ツの間切あり。山の形勢雄にして扳五穀ハらふなり。土綿。繭紬。白紙。蠟燭。螺。魚ホの物を産す。山ゟ雞。豚。牛。馬多し。又海ホ黒魚あり。この好て水の上ゟおよぐ。これを墨魚と名く。又西北より五ツの嶋あり。第一を度那奇山と名く。姑米山と遠うゝべし。山ゟ牛麦し。

毛魚ハ此方ふぐのごとくにて又ふぐのごとくなるべし
仍信濃ゟ毛魚細小、外視六修、煮二但爛有味七月朝前後五日八朝前後五日於海中二排ヲ陣ヲ出ヅ他月則否ト云

第二を栗国嶋と名く。物のひでゝ姑米山の人と相似たり。この山の鐵樹他所ゟ生ぜざれどもゟ勝ること中山北山の間なる。小石山はして。四方ハ黄沙なり。潮の漲るときそ三四町を隔水の退くときハ徒渉して至るべし。山ゟ稲田あり。黍穄豆麥を産て。第四を葉壁山と名く。又伊平屋嶋とも称ふ。中山の西北三十里ゟあり。この嶋の米最佳。麥穄。豆。棉花。蕉。綠海膽。毛魚あり。嶋の中ゟ一ツの山あり。宛ゐとして龍の如し。第五を硫黄山と名く。又黒嶋と称ふ。山ゟ多し。因て多婦ともよべり。中山の西北三十五里ゟあり。姑米山と南北相峙。山ゟ草木なし。採硫磺戸四十餘家あり。その人眼目ハこれ羊の如くほして精明なり。ハこれ硫磺の氣ゟ蒸るゝ故なり。ちなふ山あり。これを灰堆山とよぶ。又東北ゟ八の嶋あり。第一を由論と

名く。中山の東北五十里ふあり。芭蕉樫木多し。第二を永良部と名く。或ゐ訛て伊圍埠と称ふ。中山の東北五十五里ふあり。第三を徳嶋と名く。中山の東北六十里ふあり。第四を由呂と名く。度姑嶋の東北四里ふあり。第五を烏奇奴と名く。中山の東北七十七里六町ふあり。第六を佳奇呂麻と云ふ中山の東北七十七里ふあり。第七を大嶋と名く。度姑嶋の東北ふあり。中山を去ること八拾里琉球より水行二日ふして達るべし。その嶋長サ十二里。七ッの間切を分つ。西間切。東間切。第利。名瀬。屋喜。住用。古見ホの間切是なり。彼嶋人こゝろ〳〵小琉球と称ふ二百餘の村ありて。米粟豆薯蕷薯ふ木綿。芭蕉羅漢松桑竹牛馬。羊犬猪鶏。山猪兎鴛鴦鷺野鴨鷺旭雀鵐あり。又海ふ魚ふ紅櫻黒櫻櫨と稱ふ油樹あり。

その子を油ふ搾る。その外菓ふ猪子あり。又焼酒黒糖蘇鉄ホ皆これあり。この嶋ふ三ッの山ありて清水山菊花山永明山と名く。又嶋の北一里許ふ大なる石あり。形圓柱のごくはして。その高サ百尺こゝふ赤瀬の碑と稱ふ。ふし國王の鼻祖天孫氏の建るところなり。石の面ふ文字を勒せ。只美婦人の形を刻めり。その容止活れいごとく。いと愛そべし。石そ紫色ふして光澤あり。この邊そゞて人居るふし。按ずるふ大嶋そ。本小琉球と名く。爲朝琉球へ渡りし時ふ嶋ふ留る。故ふ伊豆の大嶋ふ擬しく。もろ〳〵大嶋の後の名ならん。第八を鬼界と名ぐく。中山を去ること九拾里。琉球東北最遠の界なり。この嶋人食ふ箸ふしてをりつてそ。後寛の滴されよ。こゝより産そ擢木至極の良材なり。夥の羊を孳れども朽蠹ぞ。その光澤もく鏡の如し。この外ふ土噶喇の七嶋あり。琉球の屬嶋よめぐび。又南ふ

七ッの島あり。第一を太平山と名く。むじめ宮古と称ふ後迷古と唱ふ。
その後終ふ訛りて麻姑山といふ是なり。此嶋中山の南二百里ほあり。
その中よ筑山と呼ぶ山甚高し。山の上ふ碧於亭あり。山の周囲五
六里なるべし。五穀牛馬多し。綿布。麻布草薦を産す又紅酒を醸
ふくとそれを太平酒と名く。第二ふ伊奇麻と名く。太平山の東南
ふあり。第三を伊良保と名づ。太平山の西南よあり。第四を姑李
麻と名く。太平山の正西ふあり。第五を達喇麻と名く。太平山の
西ふあり。第六を面那と名く。太平山の西南よあり。第七を烏噶弥
と名づ。太平山の西北よあり。以上の七嶋を國人へなべて太平山と称ふ。
亦西南ふ九ッの嶋あり。第一を八重山と名く一名北木山。太平山の
西南四里ほあり。中山を去ること二百四拾里。擿木黒木赤木ほあり。

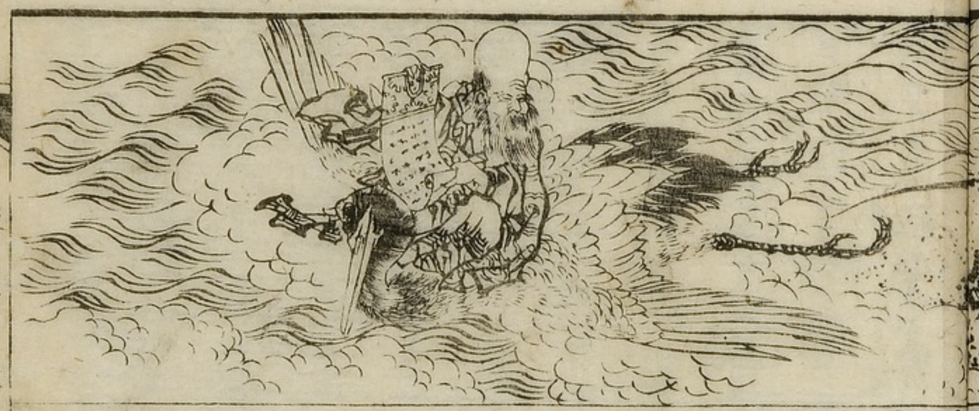
黒木又烏木ともいひ其木ふ柱のごく木の中心黒しと白きとのあり

単舊ハ此このかりてはかふ琉球ものでこれも

又赤木のありそれを赤木ともいふ又紅木ともいふ

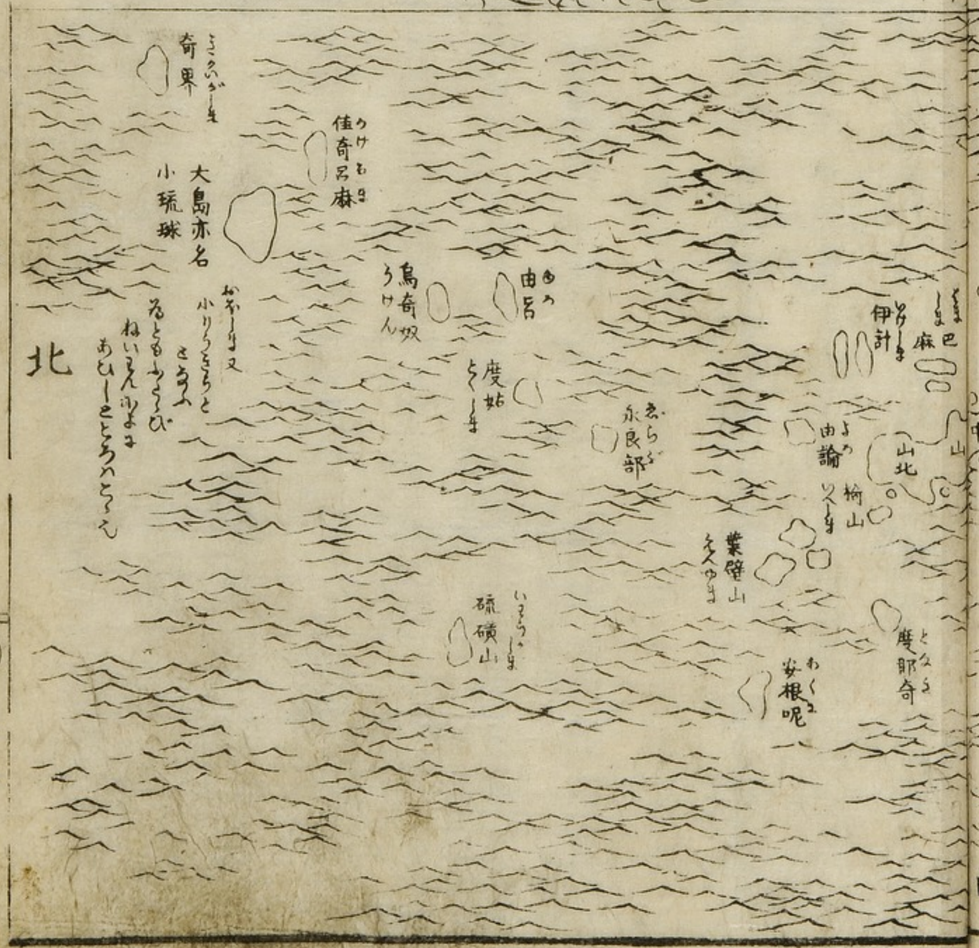
螺石ハそのうつくしきを奇石の部ふ螺怪石とあるも同物なるべし

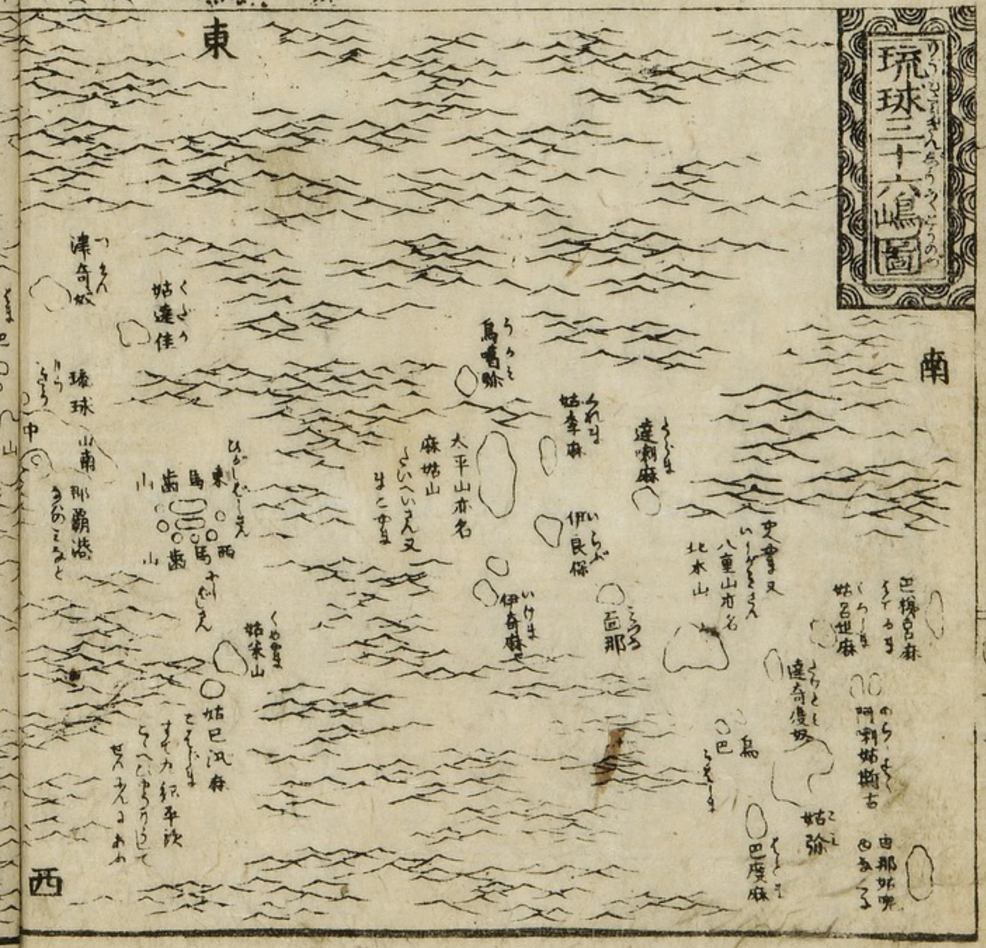
草薦牛馬。螺石。麻布棉衣海参等産を紅酒を醸して密林酒と名く。五穀あり。珊瑚。琥珀。羊肚海松。海芝。海柏。松紋ホれ奇石あり。第二を烏巴麻と名く。八重山の西南ほあり。第三を彼度間と名く。八重山の西南よあり。第四を由那姑呢と名く。八重山の西南よあり。第五を姑弥と名く。八重山の西ほあり。烏巴麻以下の七嶋よ較多ハ此島少許大きく第六を武富と名く。八重山の西。姑弥の東ほあり。第七ハ久里嶋と名く。八重山の西の方少し北よ當れり。第八を新城と名く。八重山の西ほあり。第九を波照間と名く。八重山極西北ほあり。以上八の島を國人へ皆八重山と称ふ。総三十六嶋琉球の属嶋なれども往来自在なふされハこれを審ほそるの稀なり。汝記憶して忘ることなせを後かのくを用れところのくんの児そのく父母ふ別るかれ孤島ふ漂泊ことしんぐる。





姑巴嶋ノ主従神仙ノ姿


奇界
大島亦名小琉球
北


東
南
西
北
琉球
中山
山南
山北
那覇港
姑米山
姑巴汎麻
太平山亦名麻姑山
伊良保
伊奇麻
度那
鳥
巴度麻
姑弥
阿利姑嶺古
由那奴嶺
巴機呂麻
姑呂世麻
遠奇復奴
遠刺麻
八重山亦名北水山
烏奇奴
姑達佳
津奇奴
伊計
由呂
度姑
烏奇奴
永良部
由論
椅山
度那奇
安根呢
硫磺山
紫管山
馬歯山
西表
巴麻

年十三四ヨリ及ビソノ成長スルニ従ヒ僥倖アリテ功業ヲ立ツベシ。汝ヨクコレヲ養育セヨ。時ノ至ルヲマテ。ソノ嶋五穀ヲ生ゼズレドモ山ノ仙桃アリテ四時ノ果ヲ締ベリ。コレヲ食ジテ飢ズシテ且命長シ。夫習ヒ性ト成ル。俗ニ氏ヨリ育ツトイフハ人ノ賢愚ヲ初ヨリ教ルヲ云ヘリ。今ヨリ武藝ヲ習ヒ。文字ヲ教ヘ書ヲ学ブニ努メヨ。コレハ是往昔八幡太郎義家朝臣江帥匡房卿ヨリ傳授ノ秘書ヲ写シテ。源家ニ干テ最珍重トスベキ物ナリ。コレヲ懐ニシテ。尾張國ニ落没シ。長田ヲ撃ヒラキ後。コノ書野人ノマヽニ落ルヲ。コレ彼地ニ遊歴セシ日講ジ取リ。コレヲ舜天丸ニ又コノ山ヨリ南ナル谷間ニ東ヘサシ流レ枝ニ物ノカヽレル桃アリ。索ヨ。トテ

これなりと猶ほその枝を剪て二條の征矢に別ち一の矢に伊勢太神宮と鏑箭二の矢に男山正八幡と稱し第三を阿蘇明神と稱し主従且暮ヨ祈念せよ。その矢毒龍邪鬼を征して霊験顕著の物ゆゑそれが如くんそれ桃ヨ仙木ヒヒてよく百邪を征ヒ往古異朝黄帝のとき神荼鬱壘といふ兄弟あり。性よく鬼を執ふ黄帝桃枝をもて彼兄弟が形を画せこれを門戸ニ貼ておく悪鬼を禦ぐ今の桃符桃版そのヒヒなり。又漢の時西王母ヒヒ三千年ニ一ト度子ヲ締ぶ桃をもて武帝ヨ進むこの外桃の徳枚挙ヒマあらじ。かれこれ主従命を撃ぐの攘。これホヒヒのやハあれこれ此嶋を舜天丸ヒヒ領ヒ仮ニ一旦統を分とくとも。時至らば再會の日もあれべし。疑ヘハ懈ヒ。懈ヒハ事成らじよく

勉よと說示件の兵書を舜天丸あたへ紀平次をば抱きとゝまもり給ひ只ゝ独りとなりて為朝夫婦のうえなりその往方をもしるべき叮嚀ゐ請向ど。老翁苓〳〵彼夫婦の事を告るぶ。その志を折ゐ然として巌の下より起て。老叟をば裏つ。半天おゝら升て風ゐ靡きて失ゐけり。紀平次そこの祇勢ふぶとく奇異のおもひをなしそのまゝ伏拝ごと遂ゐ舜天丸を扶掖て東の谷蔭ゐ到ど。果して桃の林あり。物ほしそうなれいその果二ッをとりもとして一ッを舜天丸ゐ進らせ一ッはおのれこれを食ゐふ。味蜜のごとく。只一ッはしてゝ腹ゐ満主従の氣力日ごろ百倍せり。かくて教られる木の下そこゝ彼処ゝ索れ共ど。老樹の枝ゐ黄金の牌弐掛ひ下そのほとりゐ白き鳥の羽五六枚あり。それぞとて彼牌をとれを康平六年三月甲酉源朝臣義家放馬と彫つけられば。紀平次へ告そ覚り。半ば訝て忙しく件の牌をとゝく押戴き稚君にこれを授説ぜよ。それゝん昔時前九年の合戦果て後。義家朝臣亡者追福の為ゐとて。駒の鶴を放ちひぬといふ。標の札ゐ疑ひなしその鶴一隻往ゐ未綿山あて。巌君八郎為曹司ゐ再生の恩を稟しよう。志ぐれの灵奇を示せるあり。既ゐ稚君の誕生しゐれとても白鶴屋の棟を翔ゝりぬ。夫鶴ハ仙禽ゆえて齢千六百年ほして飛びめて定まり。白けば雪のごとく。黒ければ漆のごとし

常言ふ鶴ハ仙人の驂なりとぞいふる。年八百歳して靈奇をあらし。千載はして神変彊なし。つゝ〳〵縁故を考れふ。彼老翁ハ八幡殿の放ちまへれ鶴ゆして。浮曹司の為よ。再生の恩を報ぞれりの敎亦彼の如く無く。九霄ふ翔行きれといふ福禄壽星なり乳。楚ゝハそひ定めがことけれど。皆是嚴君の陰徳ゆしかゝぞして。ゝふ陽報ありてそ。今ハ何をう歎て侍ゝん。終ハ父上母上ふあひし進ゝそぐれのみといひ慰ゝ。舜天丸ハ年ゟおとなしく。よく其意をえりうけん。父も母とも暮ひのぐと慰らゝ雉子より慰うほし細の雨ふぞ忘の雫よ紛らしつ。紀平次ハ彼桃の枝を剪ろく。矢ふ造るゆ件の毛羽を矧。鹿の角を拾ひく鏃とし。黄金の牌を幣として二社の神ふ祝祀て。桃の古木の盧とありゝれ内よ立並べて

祈念を凝ゝし。又舜天丸ふ武藝を教るを月の磬とし或ハ毋紙押曲ゝうとし。或ハ野駒よ木の枝をくゝ。あるとゝれ砂ゆ迹つけて。文字を学ふ聰明唐悟儔なく。年十支ゆ及べる比ハよりつの所為。紀平次ふ立ましぐく。發明ゝ我と云ふ多うり。されど主従只二人姑巴嶋ふ五七年の月日ハおくるゆ。鹿の皮を衣とし。鳥の羽を衾衣とし。夜ハ崛宅の内よ卧し。昼ハ磯方ゆ千鳥の如く朝ゟ〳〵海より出る日ハ終ゝ云ふ迄ても。故々のなりとけゞべ。舜天丸ふ。三筋の征矢を伏ておゝ。今一ゝび父母ふ。あひしまゝと祈りつゝ。主を家隷をちうとし。家隷ハ主を養育とわふ。惜ねゆ存命ふ。胸苦さいふりけん。ゟひ毋ふゆ義く。

齋戒錄